

Title	英國經濟組織(高木壽一譯, 中外文化協會發行)
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1925
Jtitle	史学 Vol.4, No.1 (1925. 2) ,p.158- 160
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19250200-0158

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ふものに絶えず注意し冷冽なる觀察と鋭利なる批評眼を拂つてゐる。此の點に於て先づ吾等は第一に著者の歴史家又は評論家としての尋常ならざる天賦の力に強く印象せしめらるゝ同じく、その學識の豊富にして見識の高きに畏敬せざるを得ないのである。

次で本書の趣意とする所を窺ふに、著者はその序論に於て『此の論文の重なる趣意は近代文明に於ける羅馬チユートン兩要素の融合の最も著るしい例として帝國の内面的性質を一層細述することゝ委しく言へば、奈何にして此の如き結合が可能であつたか、奈何にしてチヤールス及びオットーが西歐に於て帝國の名稱を復活するに至つたか、奈何にして彼等の後繼者の治世を通じて帝國がその起原の記憶を保存し、而して歐洲の諸國家に影響を與へたかといふことを示すに在る。』と言つてゐる通り、本書の主眼は自ら明瞭であらうと思ふ。

羅馬は北歐蠻族の侵入に依つてさしも大なる往年のその權力と文明とは一時衰微せざるを得なかつたが、然しその燦爛たる精神文化の傳統の感化力は一時に消失するやうな薄弱なものでなかつたことは無論である。羅馬人の築きあげたる文明と權力とは餘りに永續的で且餘りに世界的であつた。羅馬は蠻人の侵入に依つて人間の肉體上に於ける權力を失つたが、その文明と權力とは其後久しく西歐羅巴人の精神を支配するに至つた。かゝる南歐文化の傳統が偶チヤールス或はオットーの如き非凡なる大天才の出現に依つて北歐に復活する、機縁を生じたといふことは、偶然のことでない。羅馬人チユートン人との合同に依つて近代の歴史が

展開したのであつて、此處に吾等は世界歴史の意義を讀むことが出来ると思ふ。蓋し共通なる文化に向ふ國民の統一化といふものが羅馬の遺した世界支那及び世界宗教の二大觀念の中に強く現はれてゐるが故である。國民のこの統一化といふものが即ち人類全體の歴史である。而して此の文化統一化の世界史的運動は、傳統の力に依つて新なる國民が覺醒することに依つて行はれたのである。いふまでもなく羅馬帝國の北歐に於ける復活は單なる古代文化の復活ではない。換言すればそれは傳統を受け入れ此を飽和することに依つてそれ自身の創造的活動を展開したのであつて、此處に新時代即ち獨逸帝國が生れたのである。吾等は今日の西歐羅巴の文化を以つて地中海文化が從來大西洋文化の中へ入り來つたものであると一般に考へてゐる如く、吾等は現今の運動に於て更に普遍的なる全地球を包括する國民の共同生活に向ひつゝある進歩を豫感せざるを得ないのである。

要するに本書は一面に於て羅馬及び獨逸の文化史とも目されるべきものであると同時に、現今の世界史的運動を更に鮮明にすべき有力なる鍵である。かゝる意味に於て本書の如き有益なる書籍を吾が學界に紹介されたる譯者に對し滿腔の感謝と敬意を表する次第である。

(一九二四年十二月三十一日稿 山本光郎)

英國經濟組織(高木壽一譯) 中外文化協會發行

本書はウイリヤム・ゼームス・アシユレー教授がハンブルグ植民學會に屬する一般講座の一部として一九一二年クリスマス前の

二週間の中になされた、講演の概要を一九一四年に刊行された The Economic Organisation of England の全譯である。原著者の言へるごとく、本書の特色の一はその簡潔なる點にあつて、僅か八講の中において『英國が自ら食料を供給せる農業國たりしより、主として其食料品を輸入に仰げる工業國となりし経路』、即ち『第十三世紀より現代に到る英國經濟組織の史的發展の眞髓』を概説したものである。

まづ第一講において英國が爾餘一切の西歐諸國の如く、二世紀前までは殆ど全く農業國であり、また從來英國の農業的發達が西歐諸國に於て獨特のものであつた——即ちドイツ、フランスの如きにおいては土地は多數の農民に所有耕作されたにかかはらず、イギリスにおいては耕地の大部分は比較的少數の地主によつて所有された——といふ理由から、第十三世紀の英國の農業制度、及びその出發點としてのマナーをのべ、第二講工業發達の諸階段、その出發點としてのギルドにおいては、中世より近世に至る工業の發達を(一)家族制度(二)ギルド又は手工業制度(三)家内工業制度(四)工場制度の四階段に分つて、その第二階段即ちギルド制度を研究し、第三講近世的農業の起原、マナーの崩壞においては、英國が第十八世紀にいたるまで主として農業國であつたこと、さうして勞働給付より地代給付の慣習的小作人への變化、圍墻並に耕作に代はる飼羊開始の結果としての多數の慣習的小作人の放逐、漸次に自己の耕作資本を蓄積しつゝ、ありし領主地における大農階級の發達を叙し、すべてこれらの發達が宗教改革の時

代に結果したること、またこの時代に土地が次第に商業化されてきたことをのべてある。第四講外國貿易の起原、資本及び投資の發生においては、まづ英國の外國貿易が消極的性質のもの、即ち輸出入等が殆ど悉く外國商人によつて外國船舶によつてなされた時代から、如何にして積極的のもの、即ち如何にして輸出入業が英人の手に歸したかを考察し、さうして英國貿易商人の一團體たるマーチャント・アドヴェンチュラーズ社が英國の外國貿易の創立者であり、またその出現と發達とが英國經濟的發達における新要素、即ち土地及び勞働を區別せらるゝ資本並びに投資といふ現象の發生を示すものであることをのべ、第五講家内工業とチュードル國家主義においては、第十五、六世紀の農業上の諸變遷を説明するところの、英國が始めて世界商業に参加したる商品を提供したところの、また鐵と綿以前において英國の活動及び富の基礎を創造したところの羊毛工業の内部の組織を觀察し、さうしてチュードル朝に至つて國民的精神が經濟的方面に異常な發露をなした自然の結果として、中央政府の權威が人民の經濟生活に著しく影響したことを説き、第六講農業階級と英國自治においては、土地所有と英國の議會政治との關係をのべ、第七講産業革命と契約の自由、及び第八講株式資本と資本主義の發展においては、工業の發展の最後の階段たる工場制度の成立、並びにそれと密接の關係ある大資本の到來、資本主義の發展、及びその發展の四特徴、即ち(一)集中(二)合成(三)結合(四)勞働に對抗する團體的行動を説いてある。なほ本書には經濟學上やかまじい資本につい

ての著者の一論文を最後に附載してゐる。

阿部教授は本書の序において今日經濟史研究のいまだ不十分なる所以を論じて、これは經濟學者が自己の經濟學上における學說を説明する材料として單に之を利用するもの多きを、また歴史家にしてこの研究に従事するものも經濟學そのものについての理解

なきためであることを説かれたが、この點において權威ある阿部教授の本書は僅か三百餘頁にすぎないけれども、英國經濟史の最も出色あるものゝ一であつて、譯者は篤學なる經濟史研究者であり、譯文またすこぶる嚴密にして、この方面に興味を有するものゝ必ず繙かねばならぬものである。

(松本芳夫)

(編者附記) 右の外書評原稿數編あれども紙數の都合上

本號に掲載し得ず。筆者並に讀者諸氏の御宥恕を乞ふ。